京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第二十二卷　第四號

大正十五年四月一日發行

論叢

動物界の食糧問題……教授　川村多實二

國際課稅における人及び證券の所在……法學博士　神戸正雄

勞農露國における勞働義務……教授　末川博

作州の農民騷動……經濟學士　黑正巖

世界經濟の成立過程……法學士　作田莊一

時論

自作農維持策としての地租免除……法學博士　河田嗣郎

講演

木綿工業經營の現狀一斑……商學士　井上潔

雜錄

總計豫算と純計豫算……法學士　汐見三郎

妙心寺の無盡講……經濟學士　中川與之助

京都帝國大學經濟學部紀要の刊行について……經濟學博士　本庄榮治郎

大正四年六月十日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

（號轉載）

第二十二卷（第四號　一三四）　六六八

講演

木綿工業經營の現狀一斑

——大正十四年十二月六日京都帝國大學經濟學會の例會における講演——

井上潔

木綿工業經營の現狀一斑、斯う云ふ表題を申上げて置きました、今日お話したいのは詰り紡績業を中心としまして、それに關連した外の工業にも多少觸れて見たいと思ひまして、木綿工業と云ふ字を使つたのであります、昔から生活の必要品として衣食住と云ふことを申して居ります、其衣卽ち着物の中で木綿の着物と云ふものは、一番大事なものであります、殊に日本人に取りましては非常に大事なのであります、其木綿の着物を造る道筋はどう云ふ風になつて居るかと申しますと、先づ第一に棉花の耕作と云ふ事と、それから出來ました棉から今度は綿糸を造る紡績と云ふ工程がありまして、其次には其綿糸を織物にする織布と云ふ仕事があります、それから裁縫を致して着物にするのであります、尤、織物を造る工程の前後に染めたり晒したりする工程がある、是は織る前にするものもあり織つた後にするものもあります、以上の工程は極く昔の工業の

幼稚な時代には一つの家庭の中でやつたに違ひ無いのでありますが、今日はそれぞれ違つた人に依つて各獨立の仕事として經營されて居るのが普通であります、卽ち第一の棉花の耕作は農業であります。其次に紡績業と云ふものがあり、其次に織布業がありまして、其織布の前後に加工業があり、其次に裁縫の仕事があつて始めて着物が出來上る、斯う云ふ譯であります。さうして其工業の各階段の中間に商人が入つて居る、紡績と棉花耕作の間には棉花商があり、其次には綿糸商があり、それから綿布商、それから或は衣服商と云ふものが出來かけて居るのであります。此階梯を順々に一通りお話を致しましてさうしてどう云ふ風にして其各階級が働いて居るか、最後の着物を仕上げるに出來るだけ安く、便利にする爲にどう云ふ風に各〻働いて居るかと云ふことを一通り御話申上げたいと思ふのであります。

先づ第一に棉の耕作と云ふ仕事であります、是は明治の初年迄は日本で使ふ棉は大體我が國で耕作して居つたのでありますが、段々と需要が殖ゑて來、又贅澤になつて着物を餘計着るやうになつて來たのと、人口が增して來る、それから養蠶が引合ふと云ふ所から養蠶が盛んになつて桑を作る爲に土地を段々桑の方に取られる爲に棉を作る土地が無くなつた、已むを得ず海外から棉花を輸入して日本では棉の耕作を全然拋棄すると云ふことになつてしまつた。其拋棄する決心をしましたのは明治二十九年のことであります、明治二十九年に棉花の輸入稅を廢しました。それ迄は日本內地の棉の耕作を保護する爲に棉花の輸入稅を置いてあつたのでありますが、其年に始めて日本では棉の耕作は駄目だと云ふので、內地では拋棄する決心をしたのであります、現在日

本の內地では紡績の原料としては一俵も出來ませぬ、只小袖綿とか蒲團の材料にするものが僅ばかり山陰道から出來るだけであつて、日本に出來た棉で紡績をやつて居るのは一つもないのであります。所が此生活の必要品である所の木綿の原料が日本の國の中に出來ないのは萬一の時に非常に不都合であらうと云ふことが心配になつて來ましたので、今度は朝鮮で日本の棉を作ることを計畫しました、それで今日は立派な棉が朝鮮で出來るやうになつて參りましたが、經濟的に引合ふ限りの土地に作りましても、日本の需要の僅かに三パーセント、五パーセントの數にしかならない、それ以上作るやうに致しますと米を作るのを廢めさせなければ出來ない、さう云ふ無理をしなければ朝鮮で棉を作ることが出來ないのであります。支那でも自給するだけの數量が出來ませぬで外國から輸入して居る、それで何處か安全な處に棉を作らうと云ふので、或はブラジル、アルゼンチン或は南洋諸島にいろ〳〵苦心して棉の耕作地を現在求めつゝあるのでありますが、併し何處へ持つて行つても經濟上の無理をしなければ作つた棉花を日本に送ることが出來ないのであります。それで現在に於ては印度、亞米利加等の棉產國から輸入して使ふより外途がないことになつて居ります。

其次には紡績業と云ふ仕事でありますが、是も總て手仕事でやつて居りましたのであります、幕末の文久年間に薩摩の島津公が紡績を計畫されて明治の初年に始めて運轉をしたさうですが、其當時は非常に殺伐な時代であつたので、英吉利から技師を傭つて生命の絕對安全を保證するため、家から工場に通ふにも便所に行くにも大小を差した侍が警戒したと云ふことであります、所

が明治十年西南戰爭時分頃になつて紡績業が非常に儲かるやうになつた。それで西南役後明治十五六年頃から盛んに發展致しまして、明治二十三四年頃には日本の內地には綿糸が供給超過になつて紡績が儲からないと云ふことになりました、其後各戰役每に發達致しまして今日の狀態になつて居りますが、是は手でやるのと機械でやるのとでは非常に其間に差があります。今日本には五百萬錘の紡績機械がありますが、此五百萬錘を動かす爲に十七萬人の人間が働いて居る。十七萬人で五百萬錘を動かして居りますが、昔の手で之をやるとすれば約千五百萬人乃至二千萬人の人間が要るのであります。日本中の人口六千萬人としますと、其三分の一の人が每日專門にやつて居らなければならぬ仕事を、今日は僅か十七萬人でやつて居るのであります。そこで非常に安く經濟的に出來ると云ふことが分かるのであります。まあ大體紡績業と云ふものはそれ程手でやるに較べて能率の上がる仕事でありますから、手紡が變つて機械紡績になつたのであります。

所が紡績業と云ふものは今日迄非常に良い成績を擧げて居る。利益も非常に上がつて居るのでありまして、紡績は萬年成金であると云ふことを世間で言つて居りますが、さう云ふ具合に儲かつて行くのはどう云ふ譯かと云ふと、是はやつて居る人間が其仕事に非常に眞面目になつて居ると云ふことは當然でありますが、現在紡績業は個人經營ではなく、株式會社でありまして、最初出來た惡いものは自然淘汰されて良いものに買收されると云ふことになつて、其結果良いものばかり殘つたと云ふのが其原因であると思ひます。それから此事業には比較的才能の有る者が主腦者となつて居る、どの紡績會社を見ましても若い時から紡績界で叩き上げた者がやつて居るので

あります、詰り華族樣を社長に戴くと云ふやうなことがないので、若い時から眞黑になつてやつた者が主腦者になつてやつて居る譯であります。それから資本の點に於て大變今の紡績會社は自由であります。借金に依つて經營して居る會社と云ふものはないのであります。尤も少數の例外はありますけれども、普通一流若くは二流と稱せられて居るものは、全部自分に資金を持つて居つて、借金を持つて居るものがないのであります、それ故に思ひ切つた仕事が出來ると云ふ爲に此成績を擧げて居る譯であると思ひます。

それから今度は紡績會社の營業上どう云ふ政策を執つて居るか、紡績會社の營業の狀況を一つ御話申上げる、其中で先づ原料に關してどう云ふやり方をして居るかと云ふことを申上げます。

原料の產地は日本の內地でなく、亞米利加或は印度、埃及、支那等の海外であります、最も理想的のやり方としては紡績會社が丁度臺灣の砂糖會社の如く自分で畑を作つて棉を作つたならば利益でありませうが、日本の國土が狹い爲め不幸にして出來ないのであります。であるから海外の棉を買はなければならぬ。そこで亞米利加の百姓或は印度の百姓と日本の紡績業者との關係になつて來ますが、その場合に直接に買ふのが一番に便利であり、又一番安くいける筈であります。詰り生產者から消費者へ直接賣買するのであります、直接やらなければ中へ商人を入れて、商人の手にかゝつて自分が買ふと云ふことになるのであります。現在どう云ふことをやつて居るかと云ふと、形式は商人を經て間接に買ふやうになつて居つて、實質は直接買つて居るのと同じことをやつて居る。それはどう云ふ譯かと云ふと、日本の內地に六十餘の紡績會社がありますが、

一々亞米利加及びボンベイに出張員を出して、棉を直接買ふことにしますれば非常に費用がかゝる。それよりも六十幾つかの會社のものが共同して一つに買入れをやつたならば安く上がる譯である。それで現在のやり方は殆どそれに近い事をやつて居ります。年に二百五十萬俵の棉を買つて居りますが、之を扱ふ店は僅かに三軒であります。表を見ますればいろ〳〵ありますが、日本へ來る七割五分までは三軒の棉屋でやつて居る。殘りの二割五分を他の棉商がやつて居る。之を說明すれば日本の紡績業者は共同買入れ機關を造つて居ると云ふことになる。だから紡績業者が自身で買ふよりも原料が安く買へる。でありますから是よりもつと便利に棉を買ふ方法、或は是よりもつと手數を省略する方法はないと言つて宣からうと思ひます。

それから其共同機關になつて居る棉屋は本國——本國と云ふのは亞米利加とかボンベイでありますが、それは印度ではボンベイに本據を置いて各地方に出張員を置いて、棉の產地の主なる所に工場を設けて、出盛りには每日出て來る車を一パイ〳〵品物を見て壓搾して荷造りして日本に送る。之も一番便利な方法であると思ひます。之を直買と稱して居りますが、直買をやつて居るのは印度でも亞米利加でも支那でもやつて居ります。それから近頃は埃及に出張員をやつて直買を始めた所があります。日本に入つて來る棉は直接日本人が產地で買つたものであると云ふことを御承知になつて差支ない。直接產地の百姓から日本の商人自ら買つたものであります。

それから產地で棉を買付まして、日本に來て紡績會社が消費する迄の間は可なり時日がかゝる。棉は年一回穫れるものでありますが、それは翌年穫れるまで引延ばして使つて居ります。其

間は十二三ケ月間ストツクしなければならぬ、其間の相場に對する危險なり貯藏と云ふことに對してどう云ふ風にして居るかと申しますと、それは今日の日本の紡績會社は大部分紡績會社自身が負擔して居る。收穫が出來た時に棉を買つてしまつて、さうして自分の倉に持つて居る。棉を貯藏して保管危險と云ふものは紡績會社自身でやつて居るのでありますから、產地の百姓や商人はそれを餘りやつて居ない。今日は十二月の六日でありますが、現在の紡績會社はどの位持つて居るかと云ふと來年の八月一パイ使ふ程買つて居る。ボンベイ棉は來年の五六月迄使ふのを買つて居ります。來年の六月なり八月迄の相場の危險、貯藏の危險は紡績會社で持つて居る。借金をしないでそれだけの棉を持つて居ると云ふことは、最も有利な方法で原料を持つて居ると云ふことになる、若し日本の紡績會社が資金を持たず、產地の百姓に持たせて、當座買をするならば、非常に高い保管料を拂つて損をしなければならぬのでありますが、是は經濟上見過すことの出來ない問題であらうと思ひます、

所が日本の紡績業と雖も全部之をやるのでなくて、小さい紡績會社はそれが出來なくて、大阪の市中へ着いて居るのを當座買して居るのがある。詰り今日であれば今年一パイか來年一月位迄使ふ棉を買ふ、或は來年一月に使ふ棉は一月になつてから買ふと云ふことになつて居るのは小さい紡績であります、さうすれば非常に不利益な買方をしなければなりませぬが、さう云ふ紡績業者も多少はあります。茲に大きい紡績、小さい紡績と云ふことを申しましたが、之を數字的に申しますれば、五百萬錘日本に有る中で一番大きい會社から順々に勘定しまして五の會社で二百五

十萬の錘數を持つて居る。それ以上四つ加へまして卽ち大きい方から九つ數へますれば三分の二になります。九會社で三分の二の錘數を持つて居ります、殘りの三分の一の錘數を六十ばかりの會社で持つて居る、九軒で以て六割五分の錘數を持つて居る勘定でありますから、詰り棉花商も紡績者も非常に大經營に集中して居ると云ふ有樣であります。

棉を買付ける方法は右の如くでありますが、次には棉花の輸送卽ち亞米利加或は印度から輸送する問題について申上げます。是は完全に日本の紡績業者が共同してやつて居ります。ボンベイから日本に持つて來るのは噸數にしまして年々五十萬噸の棉を送る。其爲には日本の紡績聯合會と郵船會社とで運送契約が出來て居りまして、聯合會は聯合以外の棉は積まないと云ふ約束をしまして、郵船會社は商船會社とピーオー會社を使つて專門にやつて居ります。是は郵船會社の方で一番儲かる仕事なさうであります。此仕事は完全に一團になつてやつて居るのであります。さうしてボンベイに出張員を置いて、今度はどう云ふ棉を幾ら何處に送れと云ふやうに、紡績聯合會が積取りの方法を指圖して居ります。是より安くする方法はないのでありますから輸送の方法は最も利益に出來て居るのであります。是はボンベイ棉の話でありますが、亞米利加棉、埃及棉、支那棉の輸送に付ては同樣の契約はありませぬけれども、現在ボンベイ棉は日本へ輸入する棉花の三分の二を占めて居りますから、大部分は輸送契約の恩典に浴して居るのであります。もう一つ横道に入りますが序でに申上げますことは、上海に在る日本の紡績業者はボンベイから上海に輸入する輸送組合を造りました。ボンベイから上海に持つて來る棉は四十萬俵ありますが、それ

を日本の在支紡績業者が上海に行つて英國人、支那人に對して、吾々は斯う云ふ約束をしたからお前方も組合に入れ、さうすれば同じ樣に安く輸送すると云ふことを話しまして、全部之に入つたのであります。詰り日本人が主となり、上海の紡績業者全部が一つの團體となつて、ボンベイ棉の輸送をすると云ふことが成立したのであります、是は日支親善の上にも相當効力のあることゝ考へます。

今度は買つた棉をどう云ふ風にして使ふか、或はどう云ふ風に買ふかと云ふ御話であります。棉の混合使用と云ふ問題になつて來ます。外國の棉の相場は今日は亞米利加が高いとか、ボンベイが安いとか、支那が高いとか其マーケットに依つて高低に甚しい差がある。吾々は其眞中にあつて西には印度あり東には亞米利加がある、何處でも安い「マーケット」から安いのを買へる地位にあるのであります。是は支那であれば自國内に棉が出來ますから上海に於ては厩やでも支那棉を使はなければならぬのであります、それは印度棉を持つて來れば運賃を拂はなければならぬから、高い運賃を勘定に入れて見れば支那棉の方が安い譯です。ボンベイの棉を買つても結局高くなりますから自分の國に出來る棉を先きに使はなければならぬ、所が日本の國は棉が出來ないから何處からでも各綿産地の安い物を選擇して買へる自由があります。是は支那や印度の棉産地に工場を持つて居るものより弱味のやうで、實際は寧ろ强味になつて居るかと思はれるのであります。例へば亞米利加が安ければ米棉ばかりを突進して買ふ。印度の安い時には印度棉ばかりを突進して買ふ。安いマーケットの棉を買ひますと其處の棉が値が上つて來る譯であります。印度の

棉が安い時にはそれをどん〳〵買つて相場を上げて置いて、印度の競爭力を弱くして、自分は安い棉を買つたと云ふことになるのであります。さうして買込んだならば自分の倉にはいろ〳〵な棉が入つて居ります、それを混合して使ふと云ふ必要上――糸を造る方のテクニツクから言へば混棉と云ふ事は非常に惡いのでありますが、經濟上から言へば非常に大切な事であつて、自分の國には棉が出來ないに拘らず外國の紡績と競爭することが出來るのも此混棉の經濟が重大原因の一であると考へます。此混棉と云ふことは大きな會社でないと自由に實行が出來ない。例へば一流會社と稱せられる所では一ヶ月に三萬俵の棉を使ふとするならば五千七千の棉は何處から何棉の持つて來ても使ふことが出來ますけれども、小さい會社では使用量が五百六百の少數で此中で種々の棉を買つて混合するだけの餘裕がない爲め混棉が自由に出來ませぬ。從つて結局原棉代を充分安くする事が出來ない、此點は大會社の方が利益することになつて居ります、

それから產地で棉を買ひましてから日本に着くまで、日本に着いてから製品にしてそれを賣るまでの金融はどうなつて居るかと云ふことを一通り申しますと、日本へ棉が着くまでの金融は棉屋がやつて居る。それから棉が日本に着いて、紡績會社に着いてからの金融は紡績會社がやつて居る、棉の輸送期間は二三ヶ月でありますから此期間の金融は輸入商即ち棉屋がやらなければならぬ、日本に着いてからの後の約半年、五ヶ月と云ふものは紡績會社が金融して居ると云ふ狀態であります。さうして棉屋は銀行から借金して輸入して居りますが、紡績會社は借金せずに自分の持つて居る金でやつて居りますから、銀行から借りて日步を拂ふと云ふことは殆どやつて居り

ませぬ。原料に對しては大體其位でありますが、今度は製品を賣るのにどう云ふ方法を執つて居るかと云ふことを申上げます。

製品と言へば綿糸でありますが、綿糸と云ふのは半製品であつて、更に其次にもう一度機にかけて織物としなければ役に立たぬのでありまして、綿糸の先きは織布業であります。是も前の綿の例と同じに直接織布會社に賣ると云ふのが最も利益であります、或は紡績會社が自分で織布をやつて綿糸を賣らぬと云ふことが最もよいのであります。紡績會社が直接機屋に賣ることは、少數のものはそれをやつて居ります。小さい紡績會社は自分の隣りにある織布工場に賣つて居りますが、大部分はそれをせずに大阪のマーケットに全部賣つて居ります。それは何故に大阪の糸屋に賣るかと云ふと、是は先刻棉の買付の時言つたと同じに、吾々が全國に幾百と有る機屋に直接關係を付けて、何時でも商賣が出來るやうに此關係を持續して行くと云ふことに付ては相當金がかゝる、それよりもマーケットに賣ればマーケットは總ての機屋に聯絡して居りますから何處にも賣ることが出來るのであります。丁度琵琶湖は宇治川電力其他の動力に對して立派な貯水池となつて少々旱天が續くとも絶わず水を供給して働かす事が出來るが、水源池と發電所の直結では時々斷水の危險があるのと同じやうに、綿糸市場も一の貯水池であると思ひます。田舍の機屋は欲しい時に大阪のマーケットから勝手に買ふことが出來るのであります、さう云ふ譯で必ず綿糸商に賣つて居ります。さうすると綿糸商は多くの利益を得て居るかと云ふと、始ど利益を得て居らぬのであります。大阪に居る綿糸商は糸の商賣をして居るから、利益は得て居るに違ひないので

ありますが、實は殆ど利益を得て居らぬ、何故かと云ふと、それは紡績會社の勢力が強く、同時に機業家の資力が近來著しく充實して來た爲、其中間に介在して利益を得る餘地がない。詰り紡績會社は自分の製品を賣る時に必ず自分の商標を付けて出す、是は何と紡績會社の何と云ふ物であると云ふことを標榜して賣つて居りますから、買ふ機屋の身になつて考へれば詰り鐘紡を買ふのであるとか、或は大日本紡を買ふのであると云ふ事を考へて、大阪の何と云ふ糸屋から買ふと云ふことは考へて居りませぬ、丁度吾々が切手を買ふ場合に三錢の切手を眼中に置いて店は眼中に置いて居らぬと同じことで、何々紡績の糸を買ふと云ふことを根本に置いて買ふのであります。斯う云ふ商賣のやり方では中に這入つて居る商人は利益を得ることが出來ないのであります、吾々が全國に自己製品の販賣店を特設するよりは現に存在せる糸屋を利用して賣るのは、政府が郵便切手を專門に賣る機關を設置せず煙草屋や小間物屋の片手間に賣らせると同じ理窟であると思ひます。吾々は綿糸商と云ふものを中に置いて綿糸を賣るが、其爲に損をして居ると云ふことは少しもない。却つて經費を安くして居る。詰り自分の製品に對して政府の專賣と同じに獨占の力を強め、中へ這入つた商人には利益を得る餘地がないやうにやつて居るのであります。

所が是は大多數の大きな紡績の遣方でありますが、極く少數の例外は有る。極く小さい紡績になれば月に三百俵とか五百俵の糸を出して、世間へは其糸の名前も知られてをらぬ。斯樣な糸は繼續して安全に供給せらるゝや否やが確かでないから、誰も買ふと云ふことを望みませぬ。從つて之を賣るには骨が折れます。糸屋が其糸を持つて歩いて捌いてやると云ふ位にしなければなら

ぬ。斯樣な紡績は儲からないのであります。大量に生產せらるゝ綿糸は所謂銘物と申して居りますが、少數しか生產せられぬものは雜牌物と申して商賣されて居りますから、斯う云ふものは儲かる筈がないのであります。大體紡績會社は、前に述べました如く、原料は直接產地から買取つて居るのと同じ方法で以て最も安い經費で買ひ、最も安い經費で日本に運搬して來る、さうして是が金融は借金しないで、自分の持つて居る安い金を使ふと云ふ經營方をやつて居りまして、賣るには商人を利用して居りますが、商人に利益を與へないで直接機屋に連絡すると云ふ方法で商賣して居るのであります。斯うして見ますれば紡績會社は商人に利益を與へないで、自分一人に利益を集中して居るやうなやり方になつて居るのであります。

それから先刻一寸申上げました紡績から織布會社へ製品を賣るのに、直接賣ると云ふのは一番利益な方法でありますが、それよりは寧ろ紡績會社が自分で織布工場を拵へたらどうだらうかと云ふ問題が起るのであります。詰り糸と云ふものゝ性質を考へれば直ぐお分かりになりますが、糸一梱二十番手が六百七十二萬ヤードあるのであります。四十番手は千三百四十四萬ヤードの長さがある。之を一度卷直すのにどの位手數がかゝるかと云ふと、非常にかゝるのであります、綿糸の製造工費は一俵の糸に二十番手で五十圓かゝると稱せられて居ります、其中で十五圓は一度卷返す爲めの費用であります。五十圓の工費の三分の一は六百萬ヤードのものを卷返す爲に要するのであります。それでは十五圓の金を節約する爲に、紡績と織布をやつたらどうかと云ふ問題が出て來るのであります。新しい會社を一つ造つてやるとすれば、此卷返しの費用の節約で一割

二分位の利益がある勘定であります。紡績と織布が離れて居りますれば利益することが出來ないが、之を一緒にすれば一割二分位の利益配當が出來る。其位利益が生れて來るのであります。それから此利益の外に紡績工場から織布工場に運搬する手數、其間の金利それから商人の手數とか通信の費用等いろ〳〵費用がかゝりますが、さう云ふものをすつかり勘定に入れますれば一割五分の配當に相當する節約が出來るのであります。

それ程儲かる紡績と織布の兼營は何故發達しなかつたであらうかと申しますと云ふと、是は日本で需要される織物が小巾である、それから縞柄と云ふ嗜好が種々でありますが故に、內地で織るものは機械工業に餘り適しなかつたと云ふことが一つの理由でありますが、それが明治三十七八年戰役の後、滿洲、朝鮮に木綿が賣れるやうになりましてからは、すつかり樣子が一變致しまして、廣巾の縞も柄も無い物が賣れるやうになつて、紡績會社が自分で織布をやることになりました。今日生產せらるゝ綿糸の約三分の一は紡績會社自分で持つて居りまする織布工場で使ふのであります。つまり紡績會社の三分の一だけは紡織會社になつて居る譯であります。

それでは專門に出來て居つた機屋はどうなつて居るかと云ふと、獨立の織布工場は別に自分で紡績機械を買込んで、自分で使ふ糸だけは拵へると云ふ傾向があります。最近四五年に泉州方面に紡績機械を買ひました織布業者が五つ六つあるのであります。尤も是は極く大きな所でありまして、小さい所では紡績工場を設けるだけの力はありませぬ、それ等は紡績會社のものを買ふことは買ふのでありますが、成べく兼營に近い方法を執つて、一千萬ヤードの卷直しをしないでや

らふと云ふことを考へて來たのであります。それで獨立して居りまする紡績工場の連絡を見ますれば、商賣の方は別と致しまして技術上の方面では品物を直接運ぶと云ふことになりました。以前は泉州の紡績工場で出來ました綿糸も一旦大阪に行つてそれから又泉州に返つて來て泉州の織布工場に入つて居りましたが、近頃はそれが直接行はれるやうになりました。或は中國に出來た糸を四國に直接持つて來て使はれると云ふことが非常に行はれて來たのであります。それから又荷造を段々省略する、裸で持つて來る、或は卷返しをせずに木の管に卷いた儘持つて行くと云ふことが行はれる。それで一千萬ヤードの卷返を省略することが行はれるのであります。併ながら此方法によつても、紡績と織布とを同一工場で兼營する場合に比すれば、節約せらるゝ費用は半分にも達しないのであります。

それから此商賣の上に於ては紡績と機屋とは關係がないのでありますが、技術上には非常に關係があります、例へば糸の批評、詰り糸に對する特別の註文と云ふものは、糸を買つた糸屋は眼中に置かないで、紡績會社と機屋が交渉する習慣になつて居ります。此頃買つた何々紡績の方の糸は惡いと云ふ話があれば、紡績會社から機屋に行つて實驗もする、或は機屋に行つて斯う云ふ風にすれば糸が切れませぬと云ふやうに直接連絡を取つて居る。それで何處の糸屋から買つたと云ふことは問題にして居らぬのであります。斯う云ふ風にして紡績工場と織布工場は段々接近せんとする傾向が強いのであります。

次には織布業、機屋のことを一通り御話して見たい。此織布にも非常に大規模にやつて居る所

も、小規模の所もありますが、大規模にやつて居る所は全部紡績會社のものであります。此機の臺數で申しますと千臺以上持つて居る工場は殆ど全部紡績會社がやつて居るのでありまして、獨立して居る工場は三四百臺から五百臺位なものであります。大規模のものは紡績會社でやつて居るので、小規模のものが獨立して居ると云ふ譯であります。大規模に紡績會社がやつて居る織布はどう云ふことをやつて居るかと云ふと、販賣は綿糸と同じに何々商標は斯う云ふものであると云ふことを需要者の頭に入れて、値が高くとも安くとも何々會社の商標を思はせるやうにしてやつて居ります。紡績會社の織布は大概輸出物が多いのでありますが、輸出先は支那は少くなりまして、印度から亞弗利加、それから小亞細亞、土耳古、ギリシヤ、あの邊が需要地であります。あの邊では日本の商標を知つて居る。何々の商標の物を呉れと云つて註文して來る。商人はどんな人が扱つて居つても、生産者と需要者とは連絡があるのであります。例へば日本のドラゴンと云ふものを買ふので、只ドラゴンを欲しいと云ふて買ふのでありますから、日本の製造者の商標の力がバルカンの需要者まで徹底して居るのであります。大規模の所はさう云ふ風になつて居ります、内地向の物でも矢張さうであります。内地では京都で裏地用の生地木棉が相當消費されますが裏地を造るにも何々紡績會社の何印の物を使ふと云ふことになつて居りまして、途中の商人は眼中に置かぬのであります。それが大規模の織布業のやり方である。所が小規模になりますと云ふとそれは餘程形が變つて來まして、製造者が月に百反二百反造つて、それに一つの商標を付けて賣りましても、何處に捌けたか分らない、一度買つた需要者が、もう一度買はうとしても何所

に賣つて居るかわからぬ。骨を折つても手に入れることが出來ない。だから小規模の機屋の拵へた少數の製品は同じやうな物を十把一とからげにして雜牌物として商賣して居るのであります。或は又商人の方で機屋に註文をして織らせることをやつて居る。お前の所では百臺あるから何千反出來るだらう、今度は斯う云ふ物を織れと云ふことを指圖する。機屋は只賃仕事をして織物をやつて居る。斯う云ふ狀態では此機屋は儲からない。利益は註文した商人が得るのであります。現在の織布工場の約三分の一は大規模のもので、殘りの三分の二が詰り小規模の機屋であると云ふことを云つて宜からうと思ふ。

それから其次には加工と云ふ仕事であります。加工と云ふのは染、晒等を稱するのでありますが、此加工と云ふ仕事は元は糸を染める昔の紺屋であります。糸で染めてそれを原糸にして縞物を造ると云ふのが普通であつた。所が近頃は段々變つて來まして、先づ木綿に織つて置いてそれを染めるとか、捺染をすると云ふことに段々變つて來たのであります。此加工業と云ふものは今日ではマダ充分發達致して居らぬのであります。大體內地で消費される木綿と云ふものは、機屋のある中心地に染屋があつて、其染糸で以て木綿を造ると云ふのが普通のやり方でありまして、出來上つた木綿を染めると云ふのは極く少數のものしかやつて居らぬ。でありますから此仕事は皆賃仕事であります。紺屋とか晒屋と云ふのは賃仕事になつて居ります。織上げて加工するものは、賃仕事のものと賃仕事でないものと兩方あります、例へば伏見に在る日本製布會社、東京モスリン會社の晒工場、合同紡績富士紡績の晒工場、それから鐘淵紡績でやつて居る染物工場など

は是は大規模にやつて居りまして、自分の作つた物を染物にして出すと云ふのでありますが、其他は大概染賃で以て一反幾らと云ふ染賃を貰つて賃仕事をやつて居る。でありますから儲かれば利益は商人が取つて了ふ。其代り金融上の心配はない。預かつた品物を染めるだけである、斯う云ふことになつて居ります。

それから木綿にする以前に染めると云ふ仕事が、織上げて後に染めると云ふことに變つて來るのも進歩の道程であらうと思ひます。糸と云ふものは極めて細長いものでありますから甚だ扱ひ悪い。糸の儘で染めてから後に機にかけると云ふことは、詰り西陣でやつて居るやうに一本々々糸を織込んで行つて、それにより柄や模様を出すのであつて、手數が掛るに拘らず充分自由な意匠を得る事は困難でありますが、無地に織上げたものを捺染すれば自由な意匠が雜作なく一遍に出來るのであります。今日では縞物より捺染した物を一般に厭がるやうでありますが、是は只、習慣に囚はれて居るだけで、最初から何にも囚はれずに考へれば、色糸を經と緯に組織したばかりで造つた縞柄よりは自由な意匠の出來る捺染の方が——友禪も捺染の一種と見て宜しい——遙かに進歩的であります。是はどうしても其方向に進むに違ひないと私は考へて居ります、之に依つて非常に工費の安くなることは申す迄もないことであります。

それから加工の次には裁縫の仕事がある譯でありますが、是は今日ではマダ獨立した仕事にはなつて居らぬのでありまして、大概は普通の家庭でやつて居ります。極く小部分足袋、莫大小、襯衣と云ふものは獨立した裁縫業の仕事になつて居りますが、大部分は獨立せず、賃仕事として

行はれて居ります。此裁縫と云ふ仕事が詰り將來どう云ふ風になるかと云ふことは、面白い問題でありまして、どうも現在の傾向から往きますと段〻工業的に經營されるやうになるんぢやないかと思ひます。日本の着物をレデーメードにして出すと云ふことは可なり困難なことでありますが、洗濯をする時分に洗張仕立直しをせずにする方法、例へば綿入れを廢止する等の手段を考へれば出來ないことが無いと思ひます、或は和服を廢して全部洋服にしたならば便利であらうと思ひますが、成るべくさう云ふ方面に便利な方法が出來るだらうと思ひます。

是で雜駁でありますが、各階段の工業の話は其位に致しまして、其間に挾まつて居る商人のことを一通り御話して見たいと思ひます。最初申しました通り詰り此棉の耕作者である百姓から紡績業者へ棉を運ぶ其中にある、棉花商、是はどう云ふことをして商ひをして居るかと云ふに、先刻申した通りボンベイなり亞米利加の產地に自分で出張して買込んで日本に持つて來るのでありますが、此人達のやつて居る事は、自分で思惑をして棉を買ふと云ふ力はマダ十分ないのであります。と云ふのは年に約八億圓ばかりの棉を日本に輸入しますが、此内の七割を三軒の棉屋で扱つて居りますから一軒で二億何千萬圓と云ふ棉を扱ふ譯であります。それだけの棉を買込んでは獨りでは金融が出來ませぬから、日本へ送りますれば爲替を組み銀行から金融を仰いで又買ふと云ふことになつて居ります。金融上餘り十分な働きが出來ない、其爲にどうしても紡績會社に賣らずに自分の懷で棉を買つて持つて居ると云ふことが十分出來ない、詰り本國で買へば紡績會社に賣る、紡績會社に賣れば本國で買つて置くと云ふことで、自分の懷に置くと云ふことが少いの

であります、詰り是は商内する數量に比べて經濟上の力が弱い爲めで、相場の變動が激しい爲に、棉商は只取次ぎをして居ると云ふに過ぎないのであります。

それならば其次の綿糸商はどう云ふものであるかと云ふと、是も同じことであります、是は棉商よりもつとひどい、と云ふのは糸は日本の内地で出來まして、之を消費するのは日本の内地である、而して毎月二十萬梱出來て二十萬梱を消費するのでありますから、商品としてストックして置く必要は少しもないのであります。さうすると其間に綿糸商は何の爲にあるかと云ふと、賣買の手數をするだけであります。紡績會社の爲には共同販賣、機業家の爲には共同仕入れをすると云ふのでありまして、商人としての作用は極く力の弱いものであります、又金融に付ても餘計な資本は要らないのであります。でありますから綿糸商は力が弱くとも差支ないものでありまして、又事實力が弱いのであります。もつと極端に言へば綿糸商は仕事が狹くなる、存在の餘地が無くなつて來る、是は商賣としては前途頗る不必要な商賣であらうと斯う考へられるのであります。

所が例外として此綿糸商の中でも次のやうなのがあります、小さい紡績會社へ註文して糸を造らせる、是は極く少數でありますが、それは詰り綿糸商が自分で紡績業者に糸を造らせる、さう云ふ所から發達した所の紡績會社があります。元は紡績會社に金を貸したのであるが、それが自分で紡績會社になつてしまつたと云ふ例も中にはあるのであります。

其次には綿布商と云ふものはどう云ふ商賣の仕方をして居るかと云ふことを申上げます。輸出

綿布商と內地の綿布商と分けて云つた方がよいと思ひます。內地向の綿布商は現在是は可なり有力なものである。詰り紡績會社なり織布會社から綿布を買つて、染物屋、加工屋に賣るのであります。或は又賣らずに其買つた木綿を自分が加工屋に持つて行つて加工さしてそれを輸出するとか或は內地に賣ると云ふことをやつて居るのがあります。是は可なり有力なものがあるのであります。と云ふのは自分で織布を買つて染めて織物にして出すと云ふことになれば可なり危險を侵さなければならぬ、又金融上可なり資本をかけなければならぬ、金がかゝり危險を侵さなければならぬことになりますから、自然利益が多いのであります。それで此綿布商には相當大きな有力なものがある譯であります。それから綿布の輸出をやつて居る者も相當有力なものがあります。是は內地で買込んでそれを外國に輸出して、金が入つて來るまでには相當長い期間を要するのでありますから、相當資力の有るものでなければ出來ないのであります。それから內地の織物には其外に縞物であるとか柄物であると云ふ物を扱つて居る小賣商人、元締、織物問屋と云ふものがあります。是は非常に勢力を有つて居るのであります。と云ふのは今年は斯う云ふ柄が流行るであらう、斯う云ふ物を拵へるならば流行るであらうと云ふことを織物問屋が計畫する、さうして機屋に註文して拵はせるのでありますから、それが當つて來ると其利益を取る。機屋は唯賃錢を取るだけであります、さう云ふ風に織物問屋は有力なものがあります。

其次には小賣商と云ふのがありますが、小賣商も隨分資本の要るものでありまして、買つた物を長い間、半年も寢せなければならぬことがありますから、扱ふ仕事の割合に資本の要るもので

あります。隨て是は大きな問屋のやることゝ違ひまして非常な口錢を取つて居る譯であります。それで最初の棉花商、綿糸商、綿布商、小賣商是だけの階段がありますが、此棉花商と綿糸商と云ふものは、是は眞中に挾まつて居る紡績業者に抑へられて僅かの口錢で最も經濟的な作用をやつて居るのでありますが、後の織物問屋、小賣商になれば之を壓迫する力が加はつて居ないので、隨分大きな口錢を取つて居る。之をどう云ふ風にすれば小賣商とか、織物問屋の現在取つて居る口錢を薄くして、もつと經濟的に働かせて一般消費者がもつと安く着物を着ることが出來るか。それに對しては消費する所の着物を着る消費者から相當力の強い運動が出なければならぬと思ひます。ところが事實何も出て居ないのであります。例へば消費組合と云ふのは名前だけは吾々は聞いて居りますが、一向活動して居らぬ。英吉利では非常に消費組合は力の强いものがあるさうでありますが、さう云ふ方面に對しては特に物を云ふだけの消費組合は一つもないやうであります。此小賣商と云ふ階段からは多少毛色の變つたものが出來ました。近來デパートメントストーアがメキ〳〵と頭を擡げて來たことであります。是によつて問屋を刺戟すると云ふか壓迫すると云ふか、兎に角問屋に對してもつと安く仕入れると云ふことが出來るやうになりはしないかと思ひます。詰りデパートメントストーアは直接生產者である機屋と連絡を付けまして、其間に挾まる餘計な問屋と云ふものを排斥して、さうして問屋の取る口錢なり費用を節約すると云ふことになりはしないかと考へて居ります。デパートメントストーアは漸く大都會だけに出來たのでありまして、今の所では極く力の弱いものでありますが、是が將來大に發達してさう云ふ方面に

延びはしないかと考へて居るのであります。

それで最初から云ふと棉の耕作、それから紡績・織物、加工、裁縫是だけの仕事の中で一番大規模に集中されるのは紡績でありまして、最も資力を持つて經濟的に經營して居るのが紡績會社、其紡績に關連して居る所の商人は、紡績會社の勢力の爲めに充分の口錢を取ることが出來なく最も經濟的になるやうな方法に經營をされて居るが、紡績會社の手を離れて織物問屋、小賣商人の手になつて來ると強い力が省けて極々ルーズな姿になりまして、將來節約する餘地が幾らもあるのであります。尤も最後の一般消費者は直接利害關係あるに拘らず斯う云ふ問題に無頓着でありまして、もつと安く仕上げると云ふことに付ては何等の手段を講じて居らぬといふ有樣であります。

それで紡績から裁縫迄の間の階梯に對して、最初の階梯を占めて居る紡績業は一番強い力を持つて居る。或る場合には生産の制限をして値段の調節を計り、各階段を指導して居つた譯でありますが、それが此頃は自分で以て外の階段を兼營することになり、今日では紡績業者は加工迄進んで居る。もう一つ今度は裁縫迄進んで行く譯であります。裁縫をやつた所の紡績會社は無いのでありまして、大阪莫大小紡織會社は最初裁縫までやつたのでありますが、現在はやつて居りませぬ。それから日本莫大小會社と云ふのがありますが、是は紡績から莫大小までやつて、是も裁縫をやつたのでありますが、是は都合で紡績を止めてしまつたのであります、故に是からもう一歩進めば紡績會社が此階段を併呑して裁縫まで進んで行く餘地があるだらうと思ひます。之を逆

に裁縫から往かうと云ふのは足袋屋であります。福助足袋、つちや足袋と云ふのは裁縫から逆に往かうと云ふのでありますが、併しさう云ふ例は尠いので、要するに紡績會社が他階段に行つたやうに有力なものがないのであります。今日では紡績會社が綿業中の最も强い勢力である爲めに紡績が利益が多いと云ふことになつて居るのであります、換言すれば木綿工業經營方法を經濟的に改造して得た所の利益は大部分紡績業者が取得すると云ふ形になつて居る。尤も英吉利の紡績會社は少しも儲らないで、商人が儲けて居る、小さい紡績會社が澤山あつて、それが皆金融を商人から仰いで居ると云ふことを聞いて居ります。毎週一回マーケットに行つて棉を買つて來てやつて居ると云ふのであります。賣る時は糸問屋の好きなやうにして紡績會社に關係なく商人が自分の名前で、何々商會と云ふ商人の商標を付けたものを賣出して居る。でありますから紡績會社は全然商人に支配されて賃仕事ばかりやつて居る。マンチェスターの紡績會社は賃仕事だけやつて居る、斯う云ふ狀態であります。日本は之と反對で商人が十分に利益を擧げられない、さうして紡績會社は非常に有力である。綿業全體が得る利益は大して違はないのでありますが、英吉利では力の强い商人に利益を得られ、日本では紡績會社に利益を占められてゐると云ふのであります。孰れにしましても此各階段の間を最も經濟的に連絡して無駄を省いて最後に着物を成べく安く人に着せるやうにと、吾々當業者は協力してやらなければならぬ次第と考へて居ります。

（終）